

## パロディとしてのヒトラーの『わが闘争』 ("Mein Kampf")

ドイツ人のコメディアン、セルダール・ソムンツ(Serdar Somuncu)さんが、ヒトラー著の『わが闘争』から引用して暗唱朗読し、ヒトラーの繰り返したプロパガンダの不合理さを証明する。



ドイツ人のコメディアン、セルダール・ソムンツ(Serdar Somuncu)は、ショー『大殺人者の遺産』(The Legacy of a Mass Murderer)で、ヒトラーの著作『わが闘争』から引用文を暗唱し、ヒトラーのプロパガンダの不合理さを明らかにする。1991年から2001年にかけてショーは、『わが闘争』の販売・購入が法律で禁じられているドイツ、オーストリア、そしてスイスをツアーした。1,428回ショーをこなしたソムンツは、ドイツの公立学校の生徒たちを含む250,000名の観客の前で講演したと言い張り、自分がヒトラーの著作から暗唱を許可されている「唯一の人物だ」と主張している。ソムンツはくり返し、ショーに反対するネオナチ団からの脅迫を恐れ、防弾ジャケットを着て警察の保護を要求した。シュヴェーリンやインゴルシュタットなどドイツの街では、地元の行政政府の多様な党を代表する官僚たちが、『わが闘争』を暗唱するのは常識に反すると声をあげ、ソムンツのショーを妨げようとしている。

バイエルン州の財務省が、2016年1月1日に著作権が切れるまで『わが闘争』の正式な所有者である。それまで、ドイツ、オーストリアそしてスイスにおける『わが闘争』の販売は禁じられている。しかし、本を所有することは禁じられていない。ネット上で『わが闘争』は多数の言語でただでアクセスできる。2

## 言論の自由についての討論

Thirteen languages. Ten principles. One conversation.

<https://freespeechdebate.com/ja>

---

016年以降、『わが闘争』の購入を法的に許可すべきか否か討論がある。ソムンツを含む多くの評論家は、本を禁じればそのまわりに神秘的なオーラを築き上げてしまうと指摘する。他方で、実際に『わが闘争』を読めば、その中には馬鹿げたたわごとと「歴史において最も混乱して得ていない」ナンセンスが書かれているだけだとすぐわかるだろう、と評論家は言う。他の者は、本の出版は第三ドイツ帝国の犠牲者の思い出を傷つけ、危険なプロパガンダであり、ナチズムのシンボルを再復活させる恐れがあると議論する。バイエルン教員委員会(Bavarian Teachers Association)の会長は、『わが闘争』は高校の歴史の授業で全く取り扱うべきでないと意見を述べる。彼によれば、そうすれば学生が本に興味を持ってしまう危険性があると述べる。

---

出版日：7月 13, 2012